

孫育ての出番が少ない息子の親

ライフデザイン研究部 上席主任研究員 北村 安樹子(きたむら あきこ)



祖父母のライフデザインと孫育て

内閣府の調査によると、老後における子どもや孫とのつきあい方について「いつも一緒に生活できるのがよい」と考える60歳以上の男女は次第に減少し、「ときどき会って食事や会話をするのがよい」と考える人が増えている（「平成27年度 第8回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」）。以前は前者の関係を支持する人が最も多かったが、2000年代以降は後者の関係を支持する人がこれを上回るようになった。

シニア世代におけるこのような価値観の変化の背景には、社会保障制度の進展とともに、人々が現役時代から経済面の人生設計を行えば、老後の生活資金や介護を子や孫に頼ることなく過ごせる世の中になってきたことがある。ただし、60歳以降の人生が長期化しつつある現状をふまえると、今後は60歳以降もできるだけ長く働き続けて老後の生活資金を積み増そうとする人が増える可能性がある。つまり、60歳以降に子や孫とどのような距離感でつき合っていくのかは、シニア世代の老後の生活資金の準備状況や就労等によって今後さらに多様化すると考えられる。

母親の6割弱が祖父母からの支援あり

シニア世代の意識にこのような変化が生じている一方で、子育て期の親にとって祖父母は依然、子育ての重要な支援者として頼りにされている現実がある。例えば、子どもがいる1万組以上の夫婦から回答を得た内閣府の調査によると、親からの子育て支援について、母親では「とてもよく支援をしてもらっている」または「よく支援をもらっている」と答えた人が57.6%と、「まったく支援をもらっていない」または「あまり支援をもらっていない」と答えた人（22.0%）を大幅に上回った（「平成23年度都市と地方における子育て環境に関する調査報告書」2012年3月、

なお20.4%は「どちらともいえない」と回答）。

では、祖父母による子育て支援には、子世帯との住まい方や孫の親の続柄によってどのような違いがみられるのか。本稿では全国の孫がいる55～74歳の男女1,000名を対象として行ったアンケート調査から、孫の世話と子育てに関する相談に関してこれらの点を考察する。

孫の面倒をみた経験

はじめに、孫の世話（最も親しい孫）についての回答をみる。回答した祖父母のうち、孫の母親に頼まれて孫の面倒をみた経験がある人（「現在ある」「過去にある」の合計割合、以下同じ）は、66.4%となっている。孫との居住関係別にみた場合、同居や30分未満の近居の人では8割を超えるが、別居・2時間未満の人では6割強、別居2時間以上の人では5割弱にとどまっている。孫の親の続柄別にみると、母親が息子の妻である場合よりも、娘である人の方が経験者の割合が大幅に高い。孫の世話という物理的な支援は、同居や近居の場合に、また息子の妻よりも娘からの依頼で行われやすいことがわかる。

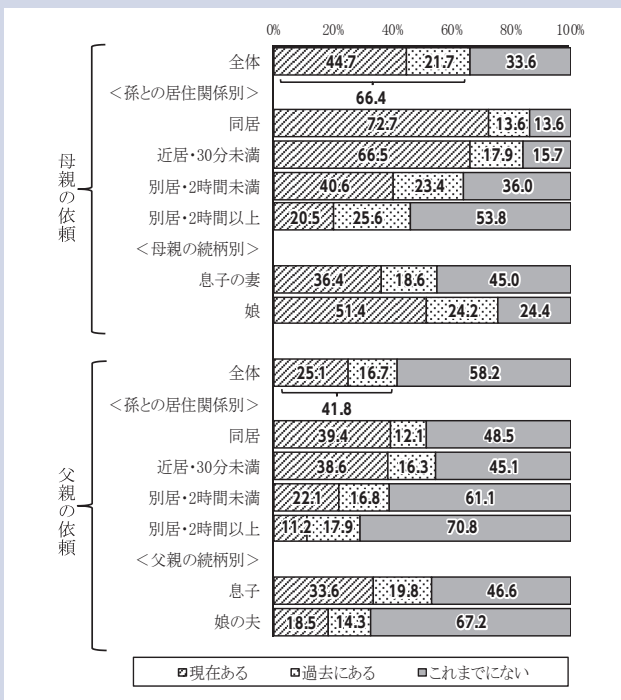
これらの傾向は、孫の父親の依頼で孫の面倒をみた経験についての回答結果とおおむね共通する。ただし、孫の父親の依頼で孫の面倒をみた経験がある人は41.8%と、孫の母親の依頼の場合に比べ20ポイント以上も低い。これらの結果から、祖父母からみた場合、娘に比べ息子からは、子育ての支援要請が行われにくいと考えられる。

子育ての相談にのった経験

次に、子育てに関する相談にのった経験についてみる。回答した祖父母のうち、孫の母親の相談にのった経験がある人は46.5%となっている。孫との居住関係別にみた場合、同居や30分未満の近居の人では経験者が半数を超えるが、別居・2時間未満や別居・2時間以上の人では4割前後にとどまっている。また、母親が息子の妻に

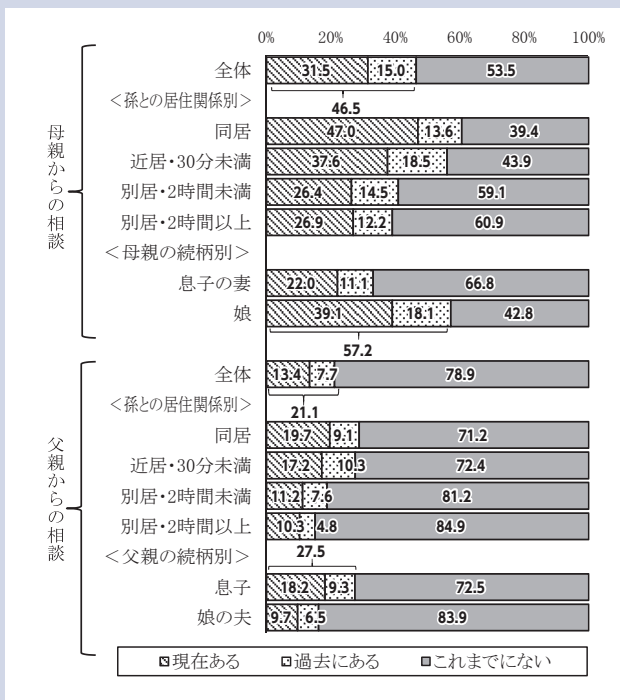


資料1 孫の親に頼まれて、孫の面倒をみた経験
(性別、孫との居住関係別、孫の親の続柄別)



(出所)北村安樹子「祖父母による子育て支援の実態と意識」
[Life Design Report]Summer 2015.7より筆者作成。

資料2 孫の親からの子育ての相談にのった経験
(性別、孫との居住関係別、孫の親の続柄別)



(出所)資料1に同じ

あたる場合よりも、娘である人の方が経験者の割合は大幅に高い。

これらの傾向は、先にみた孫の世話と同じように、孫の父親からの相談についての回答にも共通する。しかしながら、孫の父親の相談にのった経験がある祖父母は21.1%で、父親の続柄が息子であっても3割に満たない。一方、孫の母親が娘の場合には経験者が6割弱を占め、息子からの相談はこれに比べ30ポイント近く低い。祖父母にとって最も親しい孫であっても、世話という物理的な支援に加え相談という精神面の支援に関しても、息子は親を頼る機会が娘に比べ大幅に少ないことを確認できる。

子育ての出番が少ない息子の親

以上の実態を高齢期のライフデザインという視点で見ると、息子の親の方が将来の孫育てへの協力を考慮する

ことなく、自身の就労継続や健康の維持増進に注力して老後に備えやすいと考えられる。ただし、冒頭でみたような子や孫との交流志向が強い場合には、交流機会の少なさに寂しさを感じる人もいるかもしれない。

一方、娘の親の場合、自身の就労継続や健康の維持・増進とともに、孫育てへの協力を視野に入れておく必要がある。換言すれば、娘の親では自身の仕事や仕事以外の活動と孫育てとの調整が必要になる機会が息子の親より多く生じる可能性がある。こうした将来をどう捉えるかには個人差もあるが、近年、日本では息子より娘を望む女兒選好の傾向が強まっているといわれる。その背景には、経済的に互いに自立した生活を送れるのであれば、孫育ての支援を含め娘の方が好ましいつながりを長く維持できると考える人が増えていることもあるのではないだろうか。